

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和6年4月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万253トン、前年同月比99.6%、価格は1キログラム当たり321円、同116.7%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5622トン、前年同月比101.3%、価格は1キログラム当たり287円、同114.3%となった。
- 6月は、西南暖地産が終盤を迎え、高原物や東北産に産地が切り替わる時期である。ここ数年中間の産地の規模が縮小傾向であるため、4～5月の高値基調は6月も引き継がれ、市場価格は堅調に推移すると予想される。

(1) 気象概況

上旬は、暖かい空気に覆われやすかったため、旬平均気温は、北・西日本と沖縄・奄美でかなり高く、東日本で高かった。旬間日照時間は、北日本を中心に移動性高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、北日本で多く、特に北日本日本海側では平年比148%とかなり多く、1961年の統計開始以降、4月上旬として1位の多照となった。一方、東日本太平洋側と西日本で少なく、東日本日本海側、沖縄・奄美では平年並だった。旬降水量は、東日本以西では本州南岸付近に停滞した前線や低気圧の影響を受けやすく、3日頃と9日頃は大雨となった所もあり、9日頃は東日本で荒れた天気となったため、旬降水量は、東日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美でかなり多く、北・東日本太平洋側と西日本日本海側が多かった。一方、北日本日本海側は少なかった。

中旬は、期間を通して暖かい空気に覆われやすかったため、旬平均気温は全国的にかなり高かった。特に、北日本では平年差+4.3℃となり、1946年の統計開始以降、4月中旬として1位の高温となった。旬降水量は、低気圧などの影響を受けにくかったため、北日本でかなり少なく、東日本・西日本で少なかった。一方、沖縄・奄美では、前線や湿った空気の影響で13日から15日にかけて大雨となり、15日頃

を中心に4月として記録的な大雨となった所もあったため、かなり多かった。また、東日本を中心に高気圧に覆われやすかったため、旬間日照時間は、東日本日本海側でかなり多く、東日本太平洋側が多かった。沖縄・奄美では高気圧に覆われて晴れた日もあったため多く、北日本・西日本では平年並だった。

下旬は、期間を通して暖かい空気に覆われやすかったため、旬平均気温は全国的にかなり高くなり、下旬の後半を中心に多くの地点で、4月として日最高気温の歴代1位の記録を更新した。特に、沖縄・奄美では平年差+3.0℃となり、1946年の統計開始以降、4月下旬として1位の高温となった。旬降水量は、全国的に天気が数日の周期で変化し、西日本と沖縄・奄美を中心に、低気圧や前線の影響を受けやすかったため、西日本と沖縄・奄美が多かった。一方、低気圧の影響を受けにくかった東日本日本海側で少なく、北日本・東日本太平洋側では平年並だった。旬間日照時間は東日本太平洋側と西日本でかなり少なく、東日本日本海側で少なかった。北日本と沖縄・奄美では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側 太平洋側					
東日本						日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		
西日本									

資料：気象庁「4月の天候」



(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は11万253トン、前年同月比99.6%、価格は1キログラム当たり321円、同116.7%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(4月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	110,253	99.6	89.6	321	116.7	125.7	324	319	320
だいこん	8,026	94.9	82.2	133	134.3	144.9	131	126	144
にんじん	6,357	92.8	83.6	273	158.2	183.9	258	285	274
はくさい	5,316	100.2	87.6	113	130.5	152.3	143	99	105
キャベツ類	16,140	92.6	85.3	147	138.2	153.3	132	154	154
ほうれんそう	1,528	124.0	118.2	502	94.8	107.0	478	540	485
ねぎ	3,501	101.7	98.0	349	111.4	105.0	353	337	361
レタス類	6,177	98.2	89.8	275	145.8	152.2	290	266	271
きゅうり	6,122	96.1	87.3	384	123.0	142.9	389	401	361
なす	2,173	96.3	83.4	471	110.5	117.7	477	491	448
トマト	6,052	103.8	87.0	433	106.1	117.7	499	410	404
ピーマン	2,413	100.6	99.4	722	122.1	143.9	747	712	708
さといも	251	88.9	74.0	373	140.4	132.1	361	374	389
ばれいしょ	7,824	111.8	101.3	179	88.0	85.2	173	179	186
たまねぎ	10,819	85.7	87.5	142	129.2	108.7	145	143	137

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が絶対量不足から堅調な動きが続き、前年を6割近く上回り、平年を8割以上上回った（図2）。

葉茎菜類は、レタスの価格が中旬以降落ち着いたものの、やや高めに推移した前年を4割以上上回り、平年を5割以上上回った（図3）。

果菜類は、きゅうりの価格が下旬に向けやや

落ち着いたものの、高めに推移した前年を2割以上上回り、平年を4割以上上回った（図4）。

土物類は、たまねぎの価格が堅調な推移となり前年を3割近く上回り、平年を1割近く上回った。（図5）。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

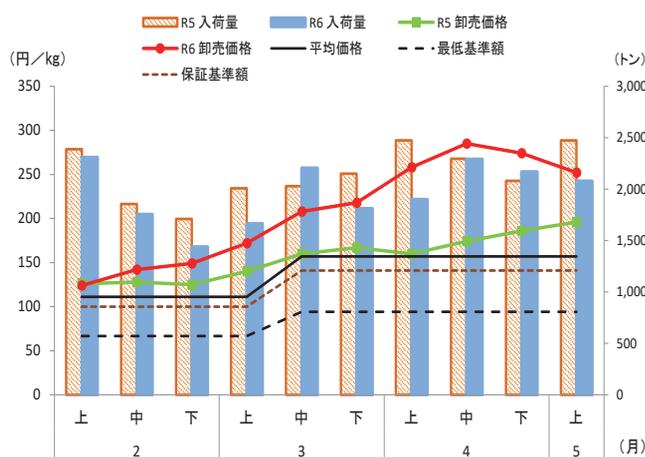


図3 レタスの入荷量と卸売価格の推移

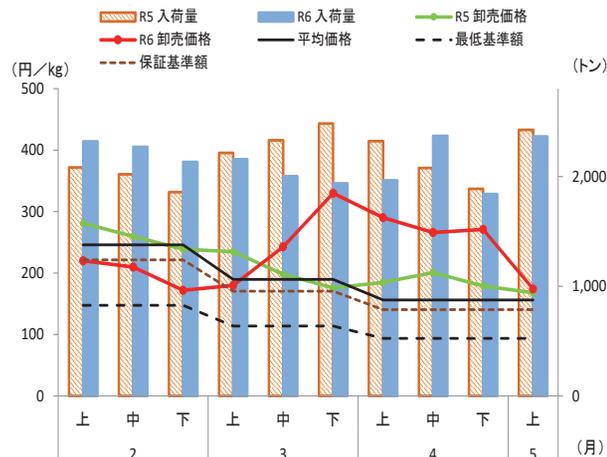


図4 きゅうりの入荷量と卸売価格の推移

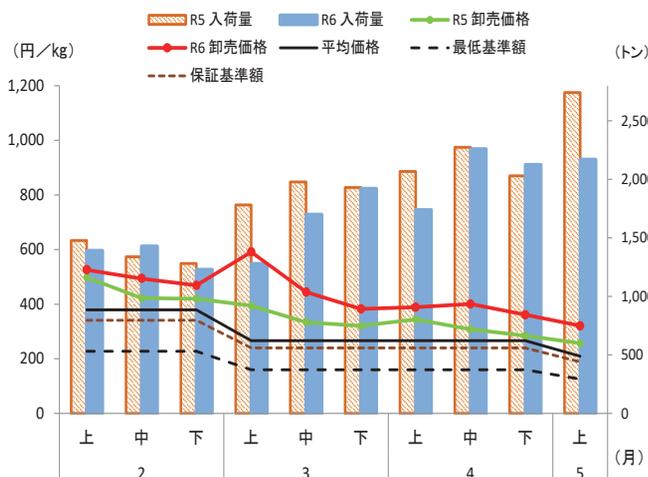
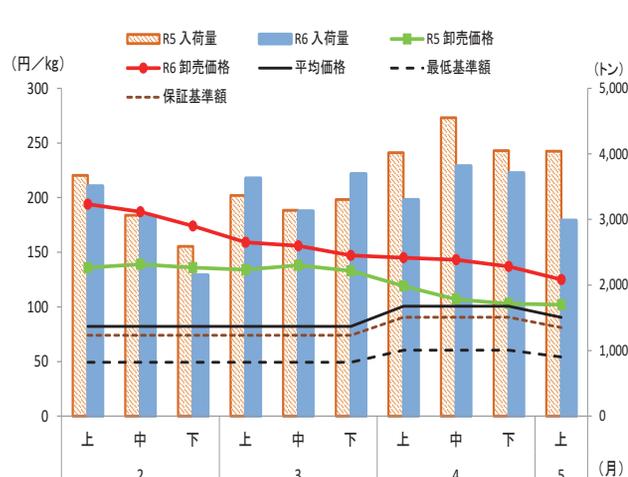


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	4月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>千葉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、日照不足および低温の影響により5日ほど生育は遅延した。また降雨により収穫作業の遅れが散見された。総入荷量は少なかつた前年をやや下回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は、数量の減少から堅調な動きが続き、前年を3割以上上回り、平年を4割以上上回った。</p>
	にんじん 	<p>徳島産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、度重なる降雨と曇天、低温の影響により肥大が悪く、サイズはMS中心となり出荷量も不安定となったことから、中国産の輸入が前年の2倍以上となった。総入荷量は少なかつた前年をかなりの程度下回り、前年を2割近く下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足から堅調な動きが続き、前年を6割近く上回り、平年を8割以上上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、暖冬の影響により生育が大幅に前進した。秋冬作の切り上がり早く、中旬以降増量となった。総入荷量は少なかつた前年並みとなり、平年を1割以上上回った。</p> <p>価格は、増量に向かった中旬以降は落ち着いたものの、前年を3割強上回り、平年を5割以上上回った。</p>
	キャベツ類 	<p>神奈川県を中心に愛知産、千葉産などの入荷があった。神奈川産の作付面積は前年並みで、3月の低温の影響により生育はやや落ち着いたものの前進傾向であった。愛知産の作付面積は前年並みで、2月の高温の影響により生育が大幅に前進し、切り上がりに向け減少した。千葉産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育は前進したが、3月の低温や雨天の影響によりやや落ち着いた。総入荷量は少なかつた前年をかなりの程度下回り、平年を1割以上上回った。</p> <p>価格は、不足感から堅調に推移し、前年を4割近く上回り、平年を5割以上上回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>茨城産、群馬産中心の入荷となった。茨城産の作付面積は前年並みで、気温が高く生育は全体的に前進傾向であった。多湿の影響から病害が散見された。群馬産の作付面積は前年並みで、平坦地の露地作が前進したため、切り上がりとなった。高冷地は3月の低温により若干の遅れが生じ、病害は少ないものの虫害が散見された。総入荷量は前年を2割以上上回り、平年を2割近く上回った。</p> <p>価格は、高めに推移した前年をやや下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	ねぎ 	<p>千葉産を中心に茨城産、埼玉産など関東産の春作～夏作の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ春作の生育はやや前進傾向となり、肥大も順調であったが、中旬以降は次第に減少した。茨城産の作付面積は前年並みで、2月は好天に恵まれ春作の生育は順調であったが、夏作については3月の低温多雨の影響により7～10日ほど遅れ、やや細物傾向となった。埼玉産の作付面積は前年を下回り、春ねぎ中心の出荷で適度な降雨により肥大も良好であった。総入荷量は前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、入荷が安定せず堅調な動きが続き、安かつた前年を1割以上上回り、平年をやや上回った。</p>
	レタス類 	<p>茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年をやや下回り、温暖な気候と適度な降雨により生育は前進傾向となったが、中旬以降は次第に減少した。後続の群馬産は降雨の影響により定植が遅れ、長野産は前年より遅延したものの、ほぼ前年並みとなっている。総入荷量は茨城産の切り上がり早く影響により前年をわずかに下回り、平年を1割強下回った。</p> <p>価格は、中旬以降落ち着いたものの、やや高めに推移した前年を4割以上上回り、平年を5割以上上回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>群馬産、埼玉産を中心に宮崎産、千葉産などの入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も一部の圃場で病害が散見された。また寒暖差による焼け果の発生も見られた。埼玉産の作付面積は前年並みで、加温作については3月の降雨や曇雨天などの影響により一部遅延が散見されたがおおむね順調で、無加温作については生育の遅延から3~5日ほど出荷が遅れた。宮崎産の作付けは前年並みで、一部草勢の低下や病害が散見されるが生育はおおむね順調だった。千葉産の作付面積は前年並みで、曇天や低温の影響により生育が遅延していたが、天候の良化に伴い回復した。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、下旬に向けやや落ち着いたものの、高めに推移した前年を2割以上上回り、平年を4割以上上回った。</p>
	なす 	<p>高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、3月は気温が高かったものの、曇雨天の影響により生育は前年並みとなった。虫害は少ないが、一部で病害がやや多かった。後続の関東産のハウス物はおおむね順調である。総入荷量は少なめに推移した前年をやや下回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は、下旬に向けやや落ち着いたものの、前年を1割強上回り、平年を2割近く上回った。</p>
	トマト 	<p>熊本産、栃木産を中心に愛知産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も、3月下旬からの曇雨天の影響により灰カビ病が散見された。栃木産の作付面積は前年並みで、越冬作の生育はおおむね順調であったが、一部で成り疲れの影響により草勢の弱い株が散見された。促成型の生育は順調で肥大も良好であったが、3月上旬の降雪や雨の影響により病害の発生がやや多かった。愛知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調である。総入荷量は少なめに推移した前年をやや上回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、3月の天候の影響により少なかった上旬に比べ、中旬以降は落ち着いたものの、高めに推移した前年をかなりの程度上回り、平年を2割近く上回った。</p>
	ピーマン 	<p>茨城産を中心に宮崎産などの入荷があった。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、3月の低温の影響により生育は遅延した。宮崎産の作付面積は前年並みで生育はおおむね順調であるが、圃場間で若干のばらつきが散見された。総入荷量は前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は月間を通して堅調な動きが続き、高めに推移した前年を2割以上上回り、平年を4割以上上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>埼玉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了している。夏場の高温・干ばつの影響により年明け以降の残量は少なく、産地によっては種芋の確保に苦慮している状況となった。中国産の輸入は前年の6倍以上となった。総入荷量は前年を1割以上下回り、平年を2割以上下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足から堅調な動きとなり、やや安めに推移した前年を4割以上上回り、平年を3割以上上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>鹿児島産を中心に北海道産の入荷となった。鹿児島産の作付面積は前年並みで、降霜の影響を受けたもののその後の生育は順調で大玉傾向となった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫は終了している。引き続き発芽が懸念されるため、選果効率が低下している。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>価格は、過去3年がかかなり高めに推移したことから、前年、平年とも1割以上下回った。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産を中心に佐賀産の入荷となった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫は終了している。夏場の高温の影響により作柄が悪く、小玉傾向となった。貯蔵量も少なく終盤を迎える。佐賀産の作付面積は前年並みで、気温の上昇と適度な降雨により生育は順調で肥大も良好である。一部病虫害が散見されているが大きな影響はない。中国産の輸入は前年の1.46倍となった。総入荷量は前年、平年とも1割以上下回った。</p> <p>価格は堅調な推移となり、前年を3割近く上回り、平年を1割近く上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5622トン、前年同月比101.3%、

価格は1キログラム当たり287円、同114.3%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(4月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	35,622	101.3	92.1	287	114.3	123.3	282	288	292
だいこん	1,944	88.0	71.5	120	139.5	155.8	106	110	163
にんじん	2,304	92.3	86.7	273	166.5	189.7	273	278	264
はくさい	2,754	87.9	87.5	120	139.5	153.4	122	112	129
キャベツ類	4,144	86.8	82.6	138	140.8	165.7	122	145	150
ほうれんそう	382	106.8	82.2	577	97.6	114.9	523	586	638
ねぎ	647	87.4	88.0	452	124.2	126.1	463	435	463
レタス類	1,133	84.9	77.8	287	147.2	160.9	279	278	317
きゅうり	1,188	81.8	76.4	381	121.7	139.6	379	395	360
なす	810	94.3	94.7	436	110.7	115.0	434	451	418
トマト	1,466	89.6	82.7	432	109.4	116.4	489	408	398
ピーマン	471	95.3	87.8	724	123.5	141.8	737	709	727
さといも	40	66.7	66.2	412	152.0	133.7	404	412	423
ばれいしょ	3,125	100.0	89.9	179	86.5	84.2	172	176	196
たまねぎ	5,010	94.5	91.9	134	130.1	114.6	137	135	128

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	4月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>鹿児島産を中心として、香川産、長崎産などの入荷があった。九州産が降雨や曇天などの天候不順の影響により品質低下品が多く、出荷できない状況となり、特に下旬の入荷量が落ち込んだ。和歌山産や徳島産は切り上りが早く、月間の入荷量は和歌山産で前年の3分の2程度、徳島産で3分の1程度となり、月間全体の入荷量は前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、品質低下品が多い中でも絶対量不足から高値で推移し、月間では前年を4割近く上回り、平年を5割以上上回った。</p>
	にんじん 	<p>徳島産を中心として長崎産の残量入荷があった。降雨の日が多く出荷が不安定なことに加え、徳島産は玉太りが悪くMサイズ中心の入荷となって入荷量は伸びず、月間では前年をかなり下回った。国産の品薄感を補うため、業務用関係を中心に中国産の輸入が増えた。月間全体の入荷量は前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>加工筋からは太物のLサイズ以上の引き合いが強く、不足感から価格は高騰し、高値推移となった。月間では前年を6割以上上回り、平年を9割近く上回った。</p>

<p>葉茎菜類</p>	<p>はくさい</p> 	<p>茨城産を中心として長崎産など九州の各産地からの入荷があった。九州産地は作付けの減少により出荷量が少なく、主力の長崎産は前年をかなり下回った。茨城産は前月の低温の影響により出遅れたが、旬を追うごとに増加し、月間では前年を下回った。月間全体では前年を下回った。</p> <p>価格は、中旬に入荷量の回復の兆しが見られたことで下落傾向となったが、加工筋からの引合いが強かったことから下げ止まり、下旬には再び上伸した。月間では前年を4割近く上回り、平年を5割以上上回った。</p>
	<p>キャベツ類</p> 	<p>寒玉キャベツ、春キャベツ共に愛知産が中心となり、春キャベツは神奈川産、長崎産、兵庫産、和歌山産などの入荷があった。愛知産の加工・業務用の発注が少なかったことにより入荷量が伸びなかったことに加え、九州各産地は作付けの減少から出荷量が少なかった。また、各産地とも前月から上旬までは前進出荷傾向であったため残量不足となり、中旬以降に入荷量が減少した。月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足から高騰し、旬を追うごとに上昇した。月間では前年を4割以上上回り、平年を6割以上上回った。</p>
	<p>ほうれんそう</p> 	<p>徳島産と岐阜産が主体となる入荷であった。徳島産は前月までは生育遅れにより出荷が停滞気味であったが、4月に入り順調な出荷となり入荷量が増加した。作の終盤で旬を追うごとに減少傾向であったが、月間では少なかった前年の3倍近い入荷量となった。後続の岐阜産はやや遅れ気味で中旬にスタートしたが、生育良好で下旬には増加し、月間では前年を大幅に上回った。福岡産は降雨や曇天の影響により少なく、前年を大きく下回った。月間全体では旬を追うごとに減少傾向となり、前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、旬を追うごとに入荷量が減少したことで上伸傾向となった。月間では前年をわずかに下回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
	<p>ねぎ（白ねぎ）</p> 	<p>群馬産と鳥取産が主体となり、埼玉産や静岡産などの入荷があった。群馬産、埼玉産は切り上りが早く、下旬には入荷量が落ち込んだ。全体的に下旬の入荷量が少なく、月間では前年を下回った。</p> <p>価格は、不足感から高値推移となり、月間では前年を上回った。</p>
	<p>ねぎ（青ねぎ）</p> 	<p>徳島産、高知産が主体となり、静岡産や香川産、近隣の奈良産や大阪産の入荷があった。各産地とも降雨や曇天の影響は受けず、比較的安定した出荷が続いた。月間全体では前年を若干下回った。</p> <p>価格は、量販店などで引合いが強くなり、発注量が多かったため旬を追うごとに上伸して高値推移となり、月間では前年を5割以上上回った。</p>
	<p>レタス類</p> 	<p>玉レタスのラップ物は兵庫産が中心となり茨城産など、裸物は長崎産を中心に九州各産地などの入荷があった。前月までの冷え込みの影響により各産地とも生育が進まず、また4月に入ってから九州産を中心に降雨や曇天の影響により出荷量が少ない状況が続き、後続の産地も出遅れた。兵庫産は上～中旬では順調な出足であったが下旬に減少した。茨城産は全旬を通じて少なく、前年の半分以下となった。月間全体では前年を大きく下回った。サニーレタスは福岡産が中心となり、玉レタス同様に前月の冷え込みと4月に入ってから悪天候の影響により出荷量が少ない上に安定せず、また作の終盤に向かって旬を追うごとに減少し月間では前年をかなり下回った。リーフレタスは福岡産を中心に香川産などの入荷があった。玉レタスやサニーレタスと同様に出荷量は少ない状況が続いたが、加工筋からの発注が多く、出荷要請があったことから増加し、前年を大幅に上回った。レタス類全体では前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、玉レタスは不足感に加えて入荷が不安定であったため高値推移となり、サニーレタスとリーフレタスは気温高や連休の需要もあって引合いが強まり高騰した。レタス類全体では前年を4割以上上回り、平年の6割以上上回った。</p>

果菜類	きゅうり 	宮崎産と高知産が主体となる入荷であった。九州産は降雨や曇天の日が多く、日照量も少なかった影響により生育が遅れ、宮崎産は出荷量が少ない状況が続き、月間では前年を大幅に下回った。高知産は順調な入荷となったが下旬に入り落ち込んだ。月間全体では前年を大幅に下回り、平年を2割以上下回った。 入荷量が不安定な中でも量販店での特売需要が多かったことから引合いが強まり、価格は高値で推移した。月間では前年を2割以上上回り、平年を4割近く上回った。
	なす 	千両系は高知産と大阪産が主体となり、長なすは福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。各産地とも3月の低温の影響により着果状態が悪く、4月の前半は出荷量が伸びず後半に回復傾向となった。高知産は旬を追うごとに増加するも前年を下回った。他の産地は下旬に入荷量を伸ばしたが、月間全体では前年、平年ともやや下回った。 価格は、入荷量が安定しないことから高値で推移した。月間では前年をかなりの程度上回り、平年を大きく上回った。
	トマト 	熊本産と愛知産が主体となる入荷となった。3月の低温の影響により着色が遅れたものが4月に出回り、上~中旬にかけて増加したが、降雨や曇天の影響により各地とも下旬には再び入荷量が減少傾向となった。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。 価格は、前月の高値の影響が残る中で入荷量の増加に伴い旬を追うごとに下落したが、月間では前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。
	ピーマン 	宮崎産と高知産が主体となる入荷であった。各産地とも降雨や曇天の日が多く、前月の低温の影響もあって樹勢が弱く出荷量は伸び悩んだ。月間全体で前年をやや下回り、平年をかなり大きく下回った。 入荷が安定しないことから価格は高値で推移した。月間では前年を2割以上上回り、平年を4割以上上回った。
土物類	さといも 	愛媛産が中心となる入荷であった。生育不良と降雨の影響により前年を大きく下回った。中国産の輸入もあり業務用関係を中心に発注が多かったが、月間全体では前年、平年とも3割以上下回った。 不足感から高値のまま推移し、旬を追うごとに上伸した。月間では前年を5割以上上回り、平年を3割以上上回った。
	ばれいしょ 	丸芋は鹿児島産を中心として長崎産の入荷があった。降雨や曇天の影響により出荷が不安定であったが、月間全体では前年を若干上回った。メークインは鹿児島産が主体となり、月の前半は北海道産の残量入荷もあった。九州産は降雨や曇天の影響により出荷は安定しなかった。ばれいしょ全体では前年並みで、平年をかなりの程度下回った。 価格は、品質低下品が多く安値の原因となっていた北海道産が終盤を迎えて下旬に切り上がったことで下旬に上伸した。月間では前年、平年ともかなり大きく下回った。
	たまねぎ 	長崎産と佐賀産が主体となり、北海道産の残量入荷と兵庫産の新物の入荷もあった。長崎産は終盤に向かい旬を追うごとに減少し、月間では前年を大幅に下回った。佐賀産も中旬をピークに下旬には減少し、月間では前年をやや下回った。兵庫産は前月の気温が低かったことに加え、4月の降雨の影響により出遅れ気味となり、旬を追うごとに増量傾向であったが月間では前年を大幅に下回った。月間全体では前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は、旬を追うごとに下落傾向であったものの、後続の新物の入荷が不安定なことから高値推移となり、月間では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした6月の見通し

6月は西南暖地産が終盤を迎えるが、やや早めに切り上がる見込みである。本格化してくる高原物や東北産は降雪や積雪の影響を受けたものの、4月の高温の影響もあって順調に回復し、遅れは生じていない。4月の高温が全般的に出荷進度を早めたのは確かであるが、豊作で市場に荷物がだぶつくことはないと予想される。

4月までの高値基調は、5～6月も続くと予想している。産地の切り替わり時期である6月は、20年ほど前までは梅雨の影響を受ければ品薄で高くなったが、ここ数年は高温を恐れたか、中間の産地の規模が縮小し市場に出荷しなくなったため、夏秋の産地である青森産や北海道産の出荷が頼りとなる。

6月の市場価格は堅調に推移すると予想している。

根菜類



だいこんは、青森産は5月末から11月までの長いシーズンの出荷となる。8月は量が少なくなるが、今のところ順調な出荷が続く見込みである。Lサイズ中心の出荷を想定しており、作付けは前年並みである。千葉産の出荷は5月連休頃にピークとなり、6月の出荷は例年を下回ると予想している。中心サイズは2Lである。大分や鹿児島、長崎の産地は高温障害により全般的に生産量が減少している。大分の高原産地は3～4月の降雨により播種のタイミングが失われ、また獣害で作付けをやめる生産者も見られるため、5～6月の出荷は例年の90%程度と予想している。

にんじんは、千葉産は5月下旬から6月までの出荷を予想している。ほぼ例年並みと予想されるが、一部休耕地があるため、例年を下回る出荷となる見込み。生育そのものは順調で、6月中旬がピークと予想している。青森産は例年と同様、6月20日過ぎ頃から出荷が始まり、ピークは8月の1週目と予想される。作付けは前年並みで、品種は「彩誉」「紅輝」である。



葉茎菜類

キャベツは、千葉産は畑での痛みと前進出荷により、例年の半分程度の出荷となっている。5月から出荷が始まる中早生のキャベツは中旬に入り本格化し、ほぼ例年並みの出荷が予想される。中心サイズはLで、7月10日頃まで出荷が見込まれる。群馬産は3月の降雪の影響が心配されたが、霜の被害もなく適度な降雨もあり、定植作業も順調に行われているため、例年どおり6月10日過ぎから出荷が始まると見込まれる。6月はほぼ例年並みの出荷と予想している。岩手産の出荷は、早くも6月下旬から始まり、ピークは7月10日頃からと予想している。出荷は10月まで続くが、前年は9月に入ってから病気が目立った。作付けは前年並みである。

はくさいは、長野産は前年より若干遅い5月15日頃から出荷が始まると予想している。6月下旬から10月までピークが続く見込み。作付けは前年並みで出荷量は例年並みと予想される。

ほうれんそうは、群馬産の出荷の現状は、3月の降雨の影響により露地物の量は少なくなっており、回復は見込めないと予想している。ハウス物は6月中～下旬から本格化し、7月上旬にピークとなる見込み。岐阜産は3月の積雪の影響により、出荷は例年の30～40%に減少している。5月の連休明けから増え、5月下旬にピークとなる見込み。6月は減少傾向に推移し、出荷量は例年を下回ると予想している。

ねぎは、茨城産は物の夏ねぎに切り替わる。3月の強風により生育に影響が出る心配があったが、現時点で肥大に問題はない。引き続き順調に生育し、Lサイズ中心の出荷となると予想される。埼玉産の出荷は、6月に入ると春ねぎの出荷から夏ねぎに切り替わるが、一部に病気が見られる。6月中旬から7月中旬がピークと予想している。6月の出荷は前年並みかやや少なめになると予想される。

レタスは、長野産は例年と同様5月28日頃から始まると予想される。3月の降雪の影響を受け生育が遅れていたが、回復傾向であり、当面のピークは6月20日～7月の初め頃までと

予想している。群馬産の出荷はやや遅れ気味であるが、まずまずの出荷となっている。ピークは5月中旬と見込まれ、20日過ぎから減少傾向となり、6月に入り再びピークを迎え7月が最大のピークになると予想される。

果菜類



きゅうりは、埼玉産は天候不順の影響により少なめとなっている。5月20日から6月にかけてピークになるが、6月10日には加温物が終わり無加温も7月10日頃には切り上がり、出荷量は平年を下回ると予想している。福島産は無加温物の出荷となっているが、出荷のピークは7～8月と予想している。露地物は6月に定植、7月に入って出荷となる見込み。生育は順調で、作付けも前年並みである。宮崎産は3月までは前年の95%の出荷となったが、4月に入り3月の天候不順の影響により減少傾向となっている。5月についても大きな変動はなく、月末頃には切り上がる生産者も出てくる見込み。6月いっぱいまで出荷が続くが、例年を下回ると予想している。

なすは、高知産の出荷の現状は、4月下旬の天候不順で例年より5～10%程度少ない。特に4月後半は実太りが悪く、出荷に影響が出ている。6月初め頃にピークとなり、その後減少し7月10日までと見込まれる。今後、回復は期待できるものの、やや例年を下回る出荷と予想される。群馬産はハウス物のピークを迎えているが、7日程度の遅れとなっている。露地物は6月初めから出荷が見込まれ、6月はハウス物を中心に併売されると見込まれる。作付けは前年並みで、現状着果の問題は見られない。福岡産は長なすが4月下旬に入りピークを迎えている。5月上旬もピークが続くが大きな変動はない。6月いっぱいではほぼ切り上がるが、7月10日頃まで出荷が続くことも予想される。

トマトは、山形産は5月24日から出荷が始まり、7月いっぱいまで続くと見込まれる。作付けは前年から若干減少している。当初の低温の影響により節間が若干短い、そのほかは生育は順調であり、当面はLサイズ中心と予想される。熊本産は、「アニモ」の出荷が順調で平

年並みの出荷となっており、5月いっぱいピークとなる見込み。6月に入り減少傾向で小玉サイズが多くなり、25日の選果で終了すると予想される。作付けは前年並みである。ミニトマトは「千果」「小鈴」で、現状は少なめの出荷である。北海道産は、前年より7日程度早く出荷が始まっている。出荷のピークは例年と同様に7月下旬から8月と予想され、作付面積は前年を下回っている。

ピーマンは、茨城産は天候不順の影響により少なめとなっている。花落ちなど3月の天候不順の影響が1カ月後に現れると予想される。今月には回復すると予想されるが、例年の90～95%とやや少なめとなる見込み。春作は6月いっぱいではほぼ切り上がり、7月には秋作の準備に取り掛かる。岩手産の出荷は、東京市場へは6月1日から始まる計画となっている。生育は、現時点では天候に恵まれ順調であり、ハウス物のピークは7月15日前後と予想される。露地物は全体の60%を占めるが、5月から定植が始まり出荷は6月中旬から始まる見込み。ハウス物は「京鈴」、露地物は「京ひかり」である。



土物類

ばれいしょは、静岡産（とぴあ浜松湖西）の「湖西の男爵」は、5月20日から出荷が始まり、6月は徐々に増えて7月上旬にピークを迎え、7月いっぱい切り上がると予想している。作付けは前年を下回っており、生育は順調である。静岡産（三島函南）の「三島のメイクイン」は、例年と同じ6月中旬から出荷が始まり、7月上旬にピークを迎え7月いっぱいとなる見込み。作付けの減少もあり、出荷量は前年を下回ると予想している。千葉産の「栗源くりもとのメイクイン」は、6月16日頃から出荷が始まり、7月10日～20日にピークを迎え、盆前に切り上がると予想される。作付けは10～20%減少している。

たまねぎは、佐賀産は3月後半に雨が続き、収穫ができなかった影響により、4月に入っても例年の70～80%の出荷となっているが、生育は良好である。6月は田植え作業の時期と重なるため出荷は減るが、特に6月15日頃か

ら6月末までは少なく、7月には再び増えてくると予想している。玉肥大についてはLサイズよりも大きくなると予想している。兵庫産は5月に入り早生の出荷となるが、平年並みのペースで遅れは生じていない。6月に入り一旦出荷は減るが、20日頃から月末にピークになると予想している。冷蔵物は年明けの2月までの出荷が見込まれる。



その他

ブロッコリーは、青森産は例年通り6月の1週目から出荷が始まる見込みである。ピークは中～下旬頃と予想され、現状生育は順調であり作付けは前年並みである。長野産の出荷は3月下旬から始まり生育は順調である。6月中旬から量が増えて7月上旬までピークとなり、その後一時的に少なくなるが途切れることなく出荷され、9月に再びピークを迎えると予想される。北海道産の出荷は6月初めから始まるが、例年よりやや早まると予想される。6月20日前後に一回目のピークを迎え、7月中旬も多くなると予想している。作付けは前年の90%と減少している。

アスパラガスは、福島産の出荷の現状は、ハウス物のピークを迎えている。露地物は5月の連休明けから始まり、以後露地物が中心となり7月中旬まで量的にまとまると予想される。10月上旬までの出荷となる見込み。株の充実については、昨年の高温の影響を受けている可能性がある。新潟産はすべて露地物で、出荷は始まっており、本格化するのは5月の連休明けで、6月上旬にピークとなって中旬には切り上がる見込み。株の充実については、昨秋の調査時点では良好である。

かぶは、青森産は5月20日頃から出荷が始まるが、3月の積雪の影響により発芽不良となったため、前年より7～10日程度遅れている。6月に入り回復すると予想されるが、出荷量は前年を下回る見込みである。7月に出荷のピークを迎え、8月は一旦減少傾向に推移するものの、10月まで出荷が見込まれる。

かぼちゃは、神奈川県産の「みやこ南瓜^{かぼちや}」は、4月下旬に着果が始まり、6月上旬から出荷開始となる見込み。出荷のピークは6月末から7月上旬と予想される。作付けはほぼ例年並みである。茨城産は5月20日前後から出荷が始まるが、ほぼ例年並みの出荷を予想している。出荷のピークは6月中旬から6月末までの見込み。作付けは若干減少している。品種は「栗将軍」である。

スイートコーンは、山梨産は3月の低温の影響により生育が1週間程度遅れていたが、現時点では回復し、5月20日前後から出荷が始まる見込み。二重トンネル物から露地物までであるが、全体のピークは6月3日の週からと予想している。品種は「ゴールドラッシュ」である。

えだまめは、群馬産のうち中山間地の「天狗の枝豆」は例年と同じ時期から出荷が始まるが、^{はし}播種時期の3月の天候不順の影響により発芽不良が発生したため、始まりの6月上旬はやや少なめとなり、例年より出荷動向に変化がみられると予想される。6月20日頃からは急増する見込み。昨年は全国的に猛暑の影響により後半は急減したが、群馬県の中山間地は猛暑の影響が少なく、ほぼ前年並みの出荷となった。今年も猛暑の予報であり、品質保持など輸送問題にも影響してくる可能性があるかと予想している。

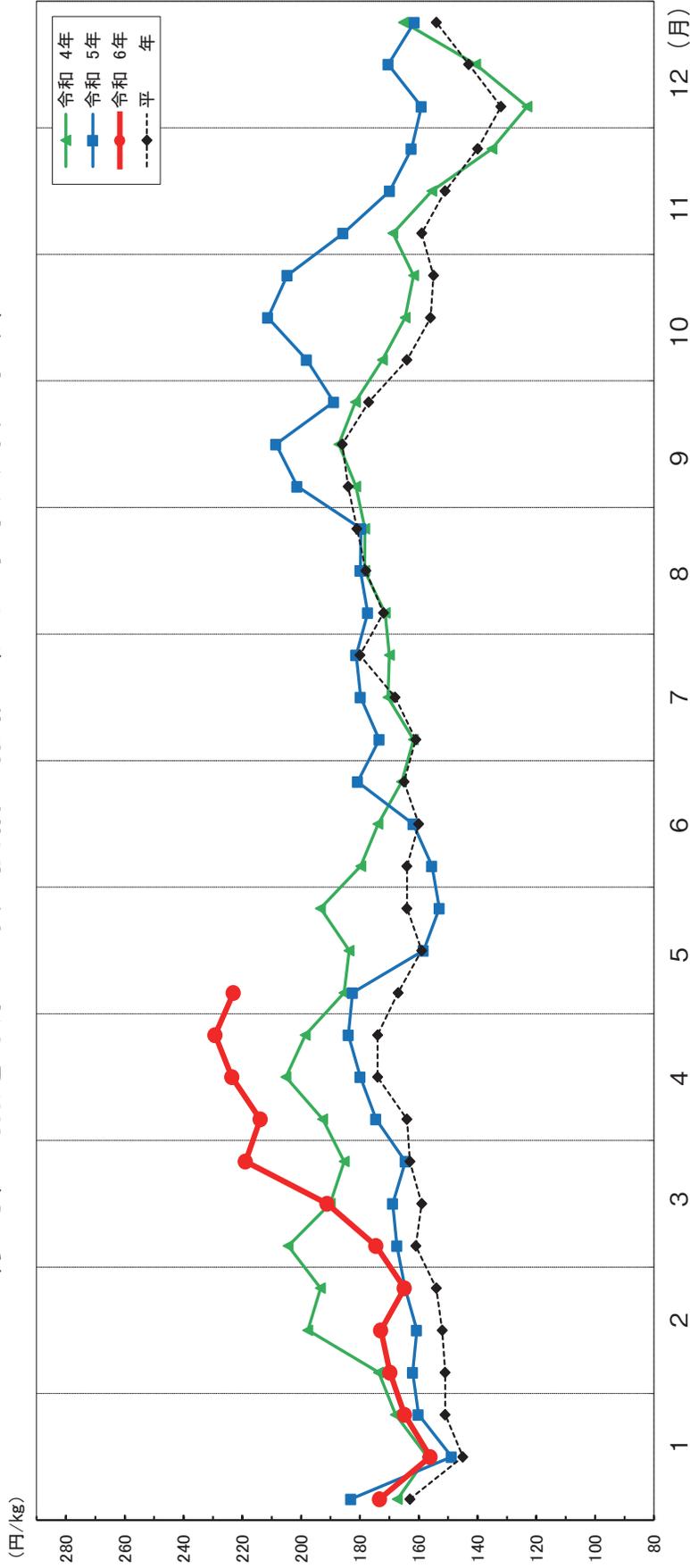
セルリー（セロリ）は、長野産の加温物は5月10日から例年並みの出荷で始まり、ピークは5月末頃から6月と予想される。無加温物は6月初め頃から出荷が始まり、中旬から本格化してくる見込み。露地物の始まりは6月末頃であると予想している。

すいかは、鳥取産は6月初めから出荷が始まるが、ハウス物のピークは6月10日から、トンネル物のピークは6月下旬となる見込み。7月10日過ぎには量が減り、20日頃には切り上がる見込みである。現在は着果時期を迎えているが、生育順調である。倉吉地区の品種は「祭ばやし」、大栄地区の品種は「春のどんらん」である。

メロンは、千葉産の「貴味^{たかみ}」は、出荷が例年よりやや遅く、6月中旬から始まりピークは6月下旬から7月上旬の見込み。作付けは前年並みである。

(執筆者：千葉県立農業大学校
講師 加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月														
	上旬	中旬	下旬																																		
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165	
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161	
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223																								
平年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。